

書誌から見た昭和時代（戦前）のワイ  
ルド受容——高橋泰、矢野峰人、矢本  
貞幹を中心に——

佐々木 隆

2005年10月

日欧比較文化研究 第4号

日欧比較文化研究会

# 書誌から見た昭和時代（戦前）のワイルド受容 ——高橋泰、矢野峰人、矢本貞幹を中心に——

佐々木隆

## プロローグ

昭和戦前のワイルド受容は本間久雄、大塚保治、益田道三を中心にした唯美主義の観点からの研究が主流であった。<sup>(1)</sup>しかし、それ以外の研究においても注目すべきものがある。本稿では、昭和10年(1935)の高橋泰『ワイルド』（研究社）、昭和18年(1943)の矢野峰人『近英文藝批評史』（全国書房）を中心に取り上げ、ホルブルック・ジャクソンの *The Eighteen Nineties* (1913) が抄訳され、昭和18年(1943)に大塚宣也訳『近代英吉利文学論』（肇書房）として出版されたことにも触れておきたい。さらに日本英文学会の学会誌に掲載された昭和16年(1941)の矢本貞幹「OSCAR WILDE の批評史的的位置——特に Pater との関係に就て——」（『英文学研究』第21巻第2号、日本英文学会）についても注目しておきたい。

## 1 高橋泰『ワイルド』

昭和10年(1935)に研究社英米文学評伝叢書61として出版されたのが高橋泰『ワイルド』である。叢書は全100巻別冊3巻となっているが、石井正雄『ラスキン』（54）、小日向定次郎『ロセッティ』（56）、大槻憲二『モリス』（57）、山宮允『スウィンバーン』（58）、田部重治『ペイタア』（60）なども含まれている。『ワイルド』は全7章構成で、「Ⅰ 序説——ワイルドの生活と芸術——」「Ⅱ エッセイストとしてのワイルド」「Ⅲ 劇作家としてのワイルド」「Ⅳ 小説家としてのワイルド」「Ⅴ 詩人としてのワイルド」「Ⅵ 『ド・プロファンディス』考」「Ⅶ 結語」に分かれている。

「Ⅰ 序説——ワイルドの生活と芸術——」では、マハフィ教授への言及が特徴であろう。ラスキンとペイタアからの影響に触

れたあと、南欧への旅を大きく取り上げている。

如上諸家の影響にも増して偉大なる印象を彼に與へたものは、南欧への旅であつた。彼はオクスフォード在学中即ち 1877 年、有名な希臘学者マハフィ (J. P. Mahaffy) に随つて、伊太利に行き、更に、希臘を訪れて古代芸術に觸るるの機会を得た。此の旅行に於ける一つの効果は、古典芸術を通して古代希臘の精神を味識し、既知の智識を、より深めるたること、も一つは、羅馬加特力教会に対し、従前よりも、一層、好意を持つに至つたことである。(2)

この旅行の詩的な収穫は 'Ravenna' であつた。明治 44 年(1911)の本間久雄「オスカア・ワイルド論」(『早稲田文学』第 64 号)、大正 3 年(1914)の貴志二彦『ワイルドの二重人格』(梁江堂書店・杉本梁江堂)、大正 12 年(1923)の本間久雄『唯美主義者 オスカア・ワイルド』(春秋社)の中でも、この南欧の旅から 'Ravenna' が生まれたことは触れられていなかった。

「Ⅱ エッセイストとしてのワイルド」では、『意向論』一卷こそは、ワイルドの藝術観であり、之に対するサイモンズの批評に同感せざるを得ない。(3)としている。

「Ⅲ 劇作家としてのワイルド」では『眞面目第一』を「ワイルドの最上の劇であることは疑ふの餘地はない(4)と述べている。その第一の理由として「バンベリ(Bunbury)といふ異彩を放つものを創り出したことにある(5)とし、さらに

この劇の本質的な愚行はワイルドの立場の非常に著しき一つの相を規定してゐるだけの話である。即ち、英國人は、冗談が背後に或種の道徳的寓意を持つとき、そして同時に、佛蘭西以外の國で死ぬのを堪へられない程、佛蘭西を愛してゐる愛蘭土作家の間に見出されるやうな或種の聰敏さを持つてゐ

るとき、そのとき最も冗談を好むといふことに外ならない。<sup>(6)</sup>

と、まとめている。

「IV 小説家としてのワイルド」で注目しておきたいのは、童話に関することである。

ワイルドの童話は、想像力の豊かな、而も彼の功利哲学を表現する。醜きもの、汚れたるもの、悪しきものを飾るために自らの飾りを剥ぐ時に善は最も美しく輝くのである。<sup>(7)</sup>

さらに、「若し、我々が、オスカア・ワイルドを最もよく知らうと欲すれば、彼の童話によつて彼を考ふるに如くはない」<sup>(8)</sup>と童話を高く評価している。このことは昭和11年(1936)の大西克礼編『大塚博士講義集』(第2巻、岩波書店)で

「意向」「ディー＝プロファディス」等のワイルド独特の作を除けば、文芸の種類の中では童話がワイルドの最も長所とする處であろう。小説は「ドリアン・グレイ」の外には価値高きものなく、戯曲も「サロメ」以外には傑出したものがないが、童話は他の作家のものに比して優れてゐる<sup>(9)</sup>

と示していることを考えると、興味深い指摘である。

詩人としてのワイルドは明治41年(1908)6月24日～26日にかけて平田禿木によつて「詩人オスカ・ワイルド」(『東京二六新聞』)、同年9月には岩野泡鳴によつて「詩人オスカー・ワイルド」(『太陽』第14巻第12第～第13号)など、明治時代には「詩人としてのオスカー・ワイルド」に焦点が当てられ、その後大正9年(1919)に日夏耿之介によつてワイルドの詩が本格的に翻訳されるようになった。しかし、研究としてワイルドの詩が積極的に取り上げられ

ることはなかった。明治時代には「新体詩」への関心から西洋詩に対して大きな関心があったと言ってよいだろう。その為、その作家が詩人としてどのような評価を受けているか、ということ以上に、まず西洋の詩を日本に紹介することが優先されたように思える。従って、ワイルドの場合も *De Profundis* が出版され、ワイルドの再評価が日本に届くようになった経緯はあるが、*The Ballad of Reading Gaol* など大きく扱われていないのが現状である。本書では、「V 詩人としてワイルド」が章立てされていることは大きな特徴と言ってよいだろう。多才なワイルドをとらえようとする試みが見られる。詩としては、“Symphony in Yellow”, “The Harlot’s House”, “The Sphinx”, “The Ballad of Reading Gaol” に注目している。今日まで、「詩人としてのワイルド」を取り上げた研究は、決して多いとは言えない。日本での研究として「詩人としてのワイルド」が本格的に取り上げられるようになったのは、昭和晩年のことである。昭和 59 年(1984) 3 月の上條真一「オスカー・ワイルドの『ラヴェンナ』逍遙」(『飯山論叢』第 1 巻第 1 号, 東京工芸大学女子短期大学部)によってワイルドの詩が大きく取り上げられ、以後「詩人としてのワイルド」、「ワイルドとキーツ」をテーマにした研究論文も見受けられるようになる。平成 8 年(1996)には伊藤勲「詩人としてのワイルド」(『東京成徳短期大学紀要』第 29 巻)、堀江珠喜「ワイルドとキーツ」(『大阪府立大学紀要』人文・社会科学, 第 44 号)、岩永弘人「詩人ワイルドにとってのキーツ殉教者と表現者のはざままで」(『東京農業大学一般教育学術集報』第 26 号)と 3 本の論文が発表された。平成 8 年(1996)に「ワイルドとキーツ」が取り上げられたのは、キーツの生誕 200 年が平成 7 年(1995)であったこととワイルドの再評価が重複したことが大きな原因であろう。もちろん、イギリスの文藝復興はキーツを先駆者として考えれば、「ワイルドとキーツ」が美的感覚によってつながるのは当然のことである。しかし、これを契機に「詩人としてのワイルド」が取り上げられるようにな

ったことは、ワイルドにとっては好ましいことでもある。

「VI 『ド・プロファンディス』考」では二つの主題があるとして、「即ち悲哀の効用と美と、而して寧ろ、人間的藝術的見地から、基督の性格を論議したことである」<sup>(10)</sup>と端的にまとめている。

「VII 結語」でもよりはっきりするが、本書はアアサア・サイモンズ (Arthur Symonds) の *A Study of Oscar Wilde* (1930) からの引用が目立つ。「はしがき」でも A. Gide, A. Ransome, A. Hendeson, R. T. Hopkins, R. H. Sherard, P. Braybrooke, A. Symons 等に負うところが少なくないと記されている。

Gide, André. Translated by Stuart Mason. *Oscar Wilde*.  
(The Holywell Press, 1905)

Sherard, R. H. *Oscar Wilde: The Story of an Unhappy  
Friendship*. (Greening, 1905)

Sherard, R. H. *The Life of Oscar Wilde*. (T. Werner  
Laurie, 1906)

Henderson, Archibald. *Interpretes of Life and the  
Modern Spirit*. (Grant Richards, 1911)

Ransome, Arthur. *Oscar Wilde: A Critical Study*.  
(Martin Secker, 1912)

Sherard, R. H. *The Real Oscar Wilde*. (T. Werner  
Laurie, 1917)

Hopkins, R. Thurston. *Oscar Wilde: A Study of the  
Man and his Works*. (Lynwood, 1913)

Braybrooke, P. *Oscar Wilde: A Study*. (Braithwaite  
& Miller, 1929)

Symons, Arthur. *A Study of Oscar Wilde*. (Charles.  
J. Sawyer, 1930)

参考文献の研究書目から以上のものを見ることができる。つまり、本書は 1905 年から 1930 年までのワイルド研究を踏まえてまとめられたものである。1905 年は *De Profundis* が出版された年である。1935 年に高橋泰『ワイルド』が出版されたことを考えると、当時としては最新の研究ということになる。なお、本書は、昭和 55 年(1980)に復刻版が出されている。

## 2 ジャクソン／大塚宣也訳『近代英吉利文学論』

ホルブルック・ジャクソンの *The Eighteen Nineties* (1913) を抄訳し、出版したのが昭和 18 年(1943)の大塚宣也訳『近代英吉利文学論』(肇書房)である。ジャクソンの *The Eighteen Nineties* はノルダウの *Entartung* (1893; 英訳 *Degeneration*, 1895) が強い影響を与えていた明治時代を過ぎ、大正に入ってから紹介されるようになった。著者のジャクソンについてはあまり多くは知られていない。原題には副題として *A Review of Art and Ideas at the Close of the Nineteenth Century* とある。「19 世紀末の芸術と思想の概観」ということになろう。

本書の構成は「第 1 章 世紀末——千八百九十年から——千九百年まで」「第 2 章 性格と傾」「第 3 章 頹廢派」「第 4 章 オスカア・ワイルド——その最後の局面」「第 5 章 オウブレイ・ピアズレイ」「第 6 章 新しい伊達主義」「第 7 章 ケルト文化の発見」となっている。「第 6 章 新しい伊達主義」は“The New Dandyism”のことである。「第 7 章 ケルト文化の発見」は原書では「第 10 章」となっている。原書の構成は 21 章構成。従って全体の 3 分の 1 の抄訳となる。第 1 章～第 6 章は昭和 30 年 (1955)の小倉多加志訳『イギリス世紀末文学』(千城書店)でも訳出されているが、「ケルト文化の発見」は取り上げられていない。その代わりに小倉訳では、「第 7 章 無比のマックス」「第 8 章 驚倒芸術」「第 9 章 美辞麗句」「第 10 章 群小詩人」「第 11 章 フランシス・トムスン」「第 12 章 新劇」「第 13 章 新小説」が訳出された。大

塚訳では「ケルト文化の発見」が入っているのが大きな特徴である。同じアイルランド文学については、原書には“G. B. S.”、つまり「ジョージ・バーナード・ショー」は章として設けられているが、イエイツについては章立てされていない。「ケルト文学の発見」では、エルンスト・ルナン、グラント・アレンを取り上げながら、アイルランド文芸運動とイエイツが中心に論じられている。日本でアイルランド文学が論じられるようになったのは、大正時代の後半になってからのことである。大正 11 年(1922)の佐藤清『愛蘭文学研究』(研究社)はその先駆的なものであろう。この研究書にはワイルドは扱われていない。現在のアイルランド文学史では、扱いは大きくないにしろ、アイルランド文学の中にワイルドの名前を見つけることができる。ダブリン生まれでありながら、ほとんどの戯曲をロンドンで発表し、また、その舞台もイギリスの社交界が多いせいもあるかもしれない。

ワイルドのアイリッシュ・アイデンティティの問題は、最近 10 年の間によく本格的に取り組まれるようになった研究テーマと言ってよいだろう。ディヴィス・コークリイの *Oscar Wilde: The Importance of Being Irish* (1994)、ニール・サメレスの “Rediscovering the Irish Wilde” (C. Geroge Sandulescu, editor, *Rediscovering Oscar Wilde*, 1994)、リチャード・ペインの *The Thief of Reason: Oscar Wilde and Modern Ireland*, 1995)、ジェルシャ・マッコーマックの *Wilde the Irishman* (1998) などがあるが、リチャード・エルマンの *Oscar Wilde* (1987) を経て、ワイルド没後 100 年に向けてワイルドの再評価が高まり、平成 7 年(1995) 2 月 14 日にウェストミンスター・アヴェイの詩人コーナーの窓にワイルドの名前が刻み込まれた。ワイルドの再評価は、イギリスにおけるワイルドの芸術的名誉の復活とアイルランドでのワイルド再評価へとつながるのである。*The Eighteen Nineties* については昭和 30 年(1955)に小倉多加志訳『イギリス世紀末文学』(千城書店)、完訳としては平成 2 年(1990)に澤井勇訳『世紀



末イギリスの芸術と思想』(松柏社)が出版されている。

### 3 矢野峰人『近英文藝批評史』

昭和18年(1943)の矢野峰人『近英文藝批評史』(全国書房)では、批評家としてのワイルドが取り上げられた。マーシュ・アーノルド、ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、アーサー・シモンズ、トーマス・スターンズ・エリオットと5名の文学論を検討したのである。「序」を見ると、「昭和十八年九月十三日 臺北にて」とあり、校正は京洛の友人岡田幸一がかかわっていたことが記されている。奥付によると、印刷は同年十二月一日となっている。全国書房は大阪市の出版社であり、臺北、京都、大阪と原稿が渡っていたことを考えると、戦時中にこうした大きな業績が発表されたことは驚くばかりである。初版は2000部印刷とある。文藝と人生との関係をマッシュ・アーノルド、ウォルター・ペイターを経て、オスカー・ワイルドについて論じている。矢野はアーノルドの批評の目的は対象をあるがままに見る事であり、ペイターはアーノルドの批評を文学・芸術の世界に限ることなく、批評の社会的機能を強調したと述べた。

ワイルドに於ける藝術と道德との関係、むしろ藝術と人生との関係を、最もよく示せるものは、何物よりも彼自身の生活であった。ペイターは生を藝術の精神で取扱ふ事を屢々口にしたが、ワイルドはこれを文字通りに信奉し、實行せんと努めた人であった。(11)

矢野はワイルドがアーノルドの批評は創作よりも下位にあり、批評の目的は対象を在るが儘にみることを助けるものであるということをおもに「藝術家としての批評家」で、論破しようとしたと述べている。つまり、「対象を本来あるがままに見る」という出発点としながらも、ワイルドは自分の印象に絶対権を与えたため

に、アーノルドと正反対の結論に達したものである。<sup>(12)</sup>

昭和 18 年(1943)に『近英文藝批評史』(全国書房)が出版される前の矢野の研究状況を見ると、1925 年(大正 14)に「ワイルドの一面観」(『饗宴』第 1 輯第 1 冊、京文社)、「世紀末詩人アアネスト・ダウスン」(『早稲田文学』第 238 号、東京堂書店)、1926 年(大正 15)に『近代英文学史』(第一書房)、1929 年(昭和 4)に『近代英文学史』(第一書房)(改訂版)、1935 年(昭和 10)に『近代英詩評釈』(三省堂)、1941 年(昭和 16)に「生きているワイルド」(『大阪毎日新聞』1 月 12 日)などを発表している。戦後、世紀末研究をさらに深めていることは言うまでもないことだ。昭和 49 年(1974)の矢野峰人監修／関川左木夫訳『サヴォイのピアズレイ』(東出版)、昭和 53 年(1978)～昭和 54 年(1979)には『世紀末文学史』(上下巻、牧神社)なども発表している。

#### 4 矢本貞幹のワイルド研究

これまで取り上げて来たワイルド研究書や世紀末を論じた研究書以外にどうしても取り上げるべきものとしては、昭和 16 年(1941)の矢本貞幹「OSCAR WILDE の批評史的位罫——特に PATER との関係に就いて」(『英文学研究』第 21 巻第 2 号、日本英文学会)がある。この論文は日本英文学会の学会誌に掲載されたものである。標題にもある通り、ペイターの影響を論じたものである。

Pater の感化もしくは影響は Wilde の生涯を通じて決定的な力となって働いてゐる。<sup>(13)</sup>

矢本はワイルドの批評家としての生涯を 3 つの段階に大別した。

即ち第一段階は今述べたやうに、Pater の弟子としてその言葉を守りながら世に出た青年時代、次ぎに Pater の影響から脱け出し、評論集 *Intentions* によって批評家としてもまた

文豪敵地位を獲得した時代、最後はその華かな生活から突然社会的な破滅に陥った後 *De Profundis* に見られるやうな自己批判或は人生批判によって「新生」に目醒めた頃である。(14)

また、美を作品に表現する観点から、

Keats は十九世紀初頭に於ける唯一人の眞の藝術家であった。明晰な直観、完全な自制、正確な美的観賞によって純粋な藝術家と称せられるべきである。十九世紀末の唯美主義の運動、Wilde の所謂イギリスの文藝復興は Keats を先駆者として起ったのである。(15)

と、キーツに触れていることにも注目しておきたい。矢本は *Intentions* においてワイルドがペイターからの模倣を脱したと述べている。

批評家 Wilde の全貌を殆ど窺はせるこの論集に収められた詩篇に於て、Wilde は確かに Pater の影響から踏み出して自分の藝術論が書ける筈はない。そこで彼は誇張と逆説を用ひて、新しいことを言はうとした。Wilde の警句集さへも出てゐるやうに、彼の藝術論が全体として認められず単にその奇警な一句や美しい一節によって有名になってゐるのはこのためである。(16)

ワイルドとペイターの違いについて次のように述べている。

Wilde は Pater の流れを汲みながら、既に一步踏み出してゐる。前ではない、横へ踏み出してゐるのである。即ち Pater が対象となつてゐる作品独特の美を明らかにすることを説い

てゐるのに反し、Wilde は対象の作品とは別に批評家自身の作品を作り上げようとしてゐること、言ひかへれば「藝術家としての批評家」を主張したことである。<sup>(17)</sup>

さらに、アーノルド、ペイター、ワイルドの「批評」について、その観点を端的に指摘している。

Arnold は批評とは対象をあるが儘にみることでありと言ひ Pater はそのために対象から受ける印象を重んじたのであったが、Wilde に至ると Arnold と反対に、対象をありの儘にみないといふことになる。<sup>(18)</sup>

矢本は昭和 23 年(1948)に『近代イギリス批評精神』(創元社)、昭和 30 年(1955)に『現代イギリス批評の先駆』(研究社)、昭和 43 年(1968)に『イギリス文学思想史』(研究社)を發表し、その中でもワイルドの批評を取り上げている。矢野、矢本以外では、昭和 2 年(1927)の正富汪洋『詩人スウィンバーン』(新進詩人社書店)、昭和 6 年(1931)のラスキン／御木本隆三訳『ラファエル前派主義』(東京ラスキン会)、昭和 9 年(1934)の川瀬武雄代表『モリス記念論集』(川瀬日進堂書店)、昭和 10 年(1935)の大槻憲二『モリス』(研究社)、昭和 11 年(1936)の石井正雄『ラスキン』(研究社)といったワイルドの周辺に関する研究が發表された。

## エピローグ

昭和戦前時代のワイルド研究の大きな特徴は、唯美主義から見たワイルド研究であるが<sup>(19)</sup>、それ以外にも当然様々なワイルド研究が輩出していることは言うまでもないことだ。ワイルドを様々なジャンルから捉えようとする研究、特に批評家としてのワイルドを捉えようとする研究も積極的に行われた。昭和 16 年(1941)の矢本貞幹「OSCAR WILDE の批評史的 position——特に PATER との関

係に就て——」、昭和 18 年(1943)の矢野峰人『近英文藝批評史』は批評の立場からマシュー・アーノルドからペイターを経てワイルドを論じたことや多方面の活動を捉えた昭和 10 年(1935)の高橋泰『ワイルド』(研究社)などは、これまでにないワイルド研究であった。

## 注

- (1) 拙著「書誌から見た昭和時代(戦前)のワイルド受容——本間久雄、大塚保治、益田道三を中心に——」(『日欧比較文化研究』第 3 号、日欧比較文化研究会、2005 年 4 月)を参照。
- (2) 高橋泰『ワイルド』(研究社、1935 年 1 月), p. 8.
- (3) Ibid., p. 42.
- (4) Ibid., p. 48.
- (5) Ibid., p. 49.
- (6) Ibid., pp. 54-55.
- (7) Ibid., p. 70.
- (8) Ibid., p. 79.
- (9) 大西克礼編『大塚博士講義集』(第 2 巻、岩波書店、1936 年 3 月)、p. 332.
- (10) 高橋泰『ワイルド』, p. 100.
- (11) 矢野峰人『近英文藝批評史』(全国書房、1943 年 12 月)、p. 242.
- (12) Ibid., p. 289.
- (13) 矢本貞幹「OSCAR WILDE の批評史的位罫——特に PATER との関係に就いて」(『英文学研究』第 21 巻第 2 号、日本英文学会、1941 年 7 月)、p. 207.
- (14) Ibid., p. 207.
- (15) Ibid., p. 210.
- (16) Ibid., p. 214.
- (17) Ibid., p. 216.

(18) Ibid., pp. 216-217.

(19) 「書誌から見た昭和時代（戦前）のワイルド受容——本間久雄、大塚保治、益田道三を中心に——」、p. 40.

キーワード：ワイルド、高橋泰、ジャクソン、矢野峰人、矢本貞幹

\* 日本におけるワイルド受容については、拙著「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、1999年6月)、「日本のワイルド受容の問題点と展望」(日本英語文化学会編『異文化の諸相』朝日出版社、1999年9月)、「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、2001年6月)、「書誌から見た昭和時代(戦前)のワイルド受容——本間久雄、大塚保治、益田道三を中心に——」(『日欧比較文化研究』第3号、2005年4月)を参照されたい。

\* 特に内容に支障がない場合には、一部旧字を新字にあらためて引用した。